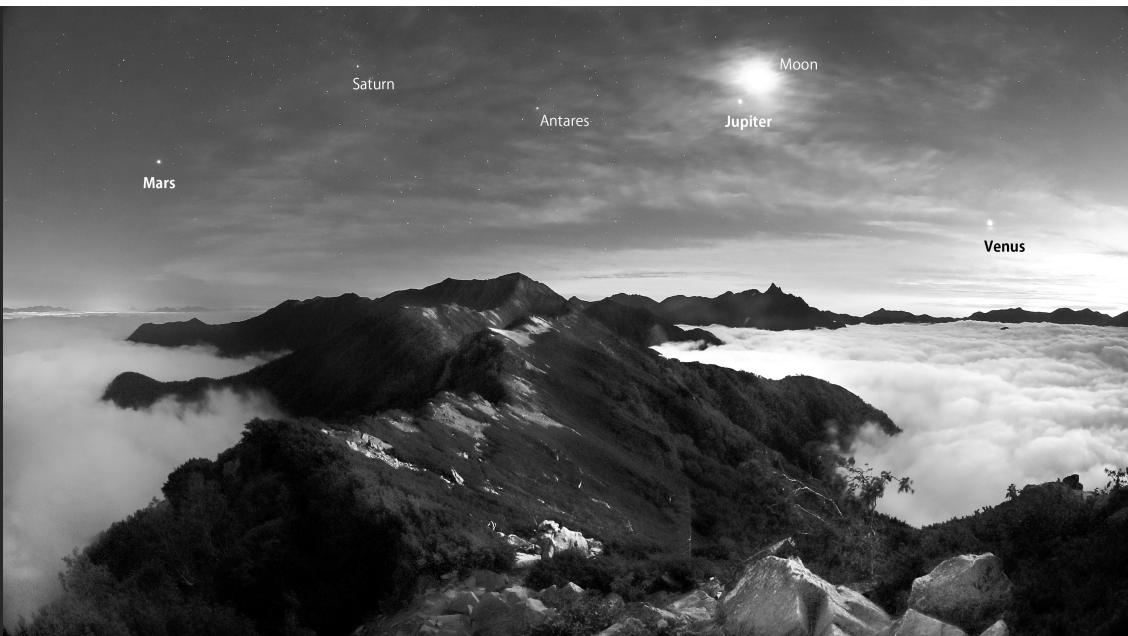


# 天文教育

# 9

2018

*Japanese Society for Education and Popularization of Astronomy*



＜特別記事＞ 新会長からのメッセージ

＜投稿＞ 視覚障がい者対応プラネタリウムプログラム「Feeling Planetarium」の取り組みについて／第 8 回高校生天文活動発表会の報告

＜報告＞ 2018 年初夏の近畿支部会報告／GHOU conference 2018 の報告  
＜その他＞ 佐藤 健さんを偲んで／ [書評] 『日本の星名事典』

## 本誌原稿募集のお知らせ

編集部では下記の原稿を募集しております。会員の皆様からの活発なご投稿をお待ちしております。

1. **原著論文**：天文教育・普及について、オリジナル性があり考察が優れ、学術論文として主な内容が印刷発表されていないもの。表題、アブストラクトには英文も付けてください。
2. **解説記事**：天文学や天文教育・普及に関する解説・紹介記事。分量は刷り上がりで6~10ページ程度。
3. **各種の報告など**：支部会やワーキンググループの活動報告、各種のイベントの報告、また天文教育・普及に関する授業の実践例など。分量は刷り上がりで2~4ページ程度。
4. **書評**：天文学や天文教育・普及に関する書籍の紹介。分量は刷り上がりで1ページ程度。
5. **会員の声**：会員の皆様からのご意見・ご感想など。分量は刷り上がりで1ページ程度。
6. **表紙の写真**：タイトルと400字以内の「表紙の言葉」とともにご投稿ください（写真のみでも構いません）。
7. **情報コーナー（各種会合・イベントの告知など）**：支部会やワーキンググループの会合、また天文学に関する各種の会合・イベントなどの情報。分量は任意ですが、スペースの関係で適宜省略させていただく場合があります。会合・イベントの開催日と会誌の発行日（奇数月下旬）にご留意ください。

- ・締め切りは1は原則として奇数月末日、2~7は偶数月15日。投稿先は post@tenkyo.net です。
- ・広告掲載を希望される方は事務局 (jimu@tenkyo.net) までお申込みください。掲載料はB5判1ページ ¥20,000-、半ページ ¥12,000-、1/4ページ ¥7,000-、チラシの折り込み ¥20,000-です。

※本誌に掲載された記事は、当会Webサイト (<https://tenkyo.net/>) にてPDFファイルの形で公開を予定しております。  
インターネットでの公開に差し障りのある場合は、ご投稿の際にその旨ご連絡をお願いいたします。

なお、2014年9月号から、当会会員に対しては会誌発行後に速やかに、パスワード制限をかけた形で閲覧できるようにし、発行から1年経過後にパスワード制限を解除して、広く一般に公開いたします。

### 【編集委員会からのお願い】

『天文教育』の編集は、すべて会員からなる編集委員によって行なわれています。ご投稿の際には以下の点についてご協力いただけますよう宜しくお願ひいたします。

- ・原稿の投稿は、原則としてMicrosoft Wordファイルでお願いします。
- ・執筆用のテンプレートがホームページ (<https://tenkyo.net/>) からダウンロードできます。できるだけこのテンプレートをご利用くださるようお願いします（執筆上の留意点なども記しています）。
- ・充分に推敲を重ねた完全原稿でご提出ください。分量や内容によっては手直しいただく場合もあります。
- ・提出データは必ず各自でバックアップしておいてください。
- ・Word以外に一太郎ファイルやテキストファイルでも受け付けております。
- ・原稿のご投稿やご質問は電子メールにて、下記のアドレスへお願ひいたします。

投稿先・質問先 メールアドレス：[post@tenkyo.net](mailto:post@tenkyo.net)

### 表紙の言葉

#### 金星、木星、土星、火星

2018年8月17日19時22分(8mm, F=4.0, カットあり)

(燕岳と大天井岳の稜線にて)

撮影者：大西浩次

いま、夕暮れの空を見上げると、西の空に金星、南西の空に木星、南の空に土星、そして南東の空に火星が見えている。これだけ、明るい惑星が一同に見えるのは珍しい。特に8月上旬は、火星が、15年ぶりの大接近で木星より明るく見えていたので、宵の明星と夜の明星と同時に、オレンジ色に輝く明星が加わり壮大な眺めであった。写真是、その名残のある8月17日、伝統的七夕の夕暮れの光景だ。残照と月明かりに照らされた北アルプスの山々の上に、金星、木星、土星、火星が並んだ姿である。このような様子も、もうすぐ見

納めになってしまう。9月21日に最大光度になった金星は、太陽との離角を一挙に縮め、10月25日には内合になってしまう。その後は、明けの明星として東の空になる。一方、火星は、最接近の頃より暗くなってきたが、まだ、マイナス1等星で輝いる。ところで、次回の火星の大接近は、17年後の2035年である。15年という周期で覚えていると、「あれ？」と思うかもしれない。実際、次回の2020年10月の火星の接近も、今回の最接近距離5759万キロに匹敵する6207万kmまで接近するのだ。しかも、2020年はうお座で最接近を迎えるので、南中高度が60度近くと高く、観望の条件は今回よりはるかに良いだろう。2020年の火星の接近も今から楽しみにしておこう。今年の夏を振り返りながら、3つの明星を見るのは、「今でしょう！」。

（大西浩次）